

中央アジアのムスリム定住民女性とイスラーム・ヴェールに関する
帝政ロシアの植民地主義的言説

Notes on Imperial Russian Colonial Narratives Relating to Central
Asian Settled Muslim Women and Islamic Veil

帯谷 知可

Chika OBIYA

Abstract As Leila Ahmed pointed out, European colonial discourse on Islam and the Muslims adopted the language of feminism in the 19th century and came to include a clear thesis that Islam was primarily oppressive to women, and such customs as veiling or segregation of women were regarded as markers of backwardness of Islamic societies. Sharing this viewpoint, for the purpose of investigating the case of Imperial Russian discourse on Central Asia (Russian Turkestan), Russian colonial narratives on Sart women and their veil in the second half of the 19th century and in the beginning of the 20th century are examined in this paper.

One of the interesting findings here is that, according to A. P. Khoroshkhin, V. P. Nalivkin and M. V. Nalivkina, Sart women at that time had triple (or three layered) veils, i. e., firstly *ro'mol*, secondly *durra*, and finally *paranji* with *chimmat*. *Ro'mol*, which used to be put on even at home and obviously have Islamic meaning, survived until today as a part of neutral traditional Uzbek clothing (as “good veil” in the context of the official discourse of contemporary Uzbekistan), while in the Soviet period *paranji* with *chimmat* was the target of the harsh attack of unveiling campaign in 1920s and then almost disappeared from public everyday life.

Russian colonizers were sometimes curious about Sart women's beauty and coquetry, as well as changes of their attitude influenced by the Russians in Central Asia, but generally they regarded that Sart women were the most oppressed, unhappy and miserable women, not only among Russian Muslims like Tatars or Kazakhs, but also among all Muslims in the world. For them the thick coat-like veil *paranji* with black net face cover *chimmat* was very visible symbol of Sart women's unhappiness which Sart men's traditional culture — Islam and patriarchy — enforced.

Keywords Russian Turkistan (ロシア領トルキスタン), Sart (サルト), women (女性), Islamic veil (イスラーム・ヴェール), colonial discourse (植民地主義的言説)

はじめに

近年の中東ジェンダー研究においては、19世紀ヨーロッパにおいて形成された、フェミニズムの言語を取り込んだ植民地主義は、本質的に女性を抑圧する、劣等なあるいは後進的

な文化としてのイスラームという言説を生み、そこに内包される「我々/他者」「進歩的/後進的」「自由/抑圧」といった二項対立的図式がヨーロッパのみならず、当時の中東植民地のヨーロッパ文化への同化を理想とするようになった男性エリートにも根強く埋め込まれ、結局のところもっぱら男性が支配的である社会がポスト植民地主義時代にいたるまで再生産され続けていることが指摘されてきている [Ahmed 1992]。そして、このような言説において、ムスリム女性が着用するイスラーム・ヴェールは、我々/他者を弁別するためのマーカーとして機能することとなり、ヨーロッパから見ればそれは抑圧的で遅れた文化を象徴するもの、逆に中東イスラーム世界から見ればそれは伝統的な文化・慣習・価値観の尊重を象徴するものとなった。しかし、そうした二項対立的な言説の応酬のかけで、本当の意味での女性の解放・自由や自己実現といった問題はいわば置き去りにされたという [Ahmed 1992: 144-168]。

筆者は、帝政ロシアとその植民地となったイスラーム地域、とりわけ中央アジアにおいても、これと同じようなイスラームとムスリムの文化についての言説が形成され、後のソ連時代になるとそれが社会主義イデオロギーのもとで変形・補強され、ソ連解体後においてもさらに別のロジックによって変形・補強されながらそのような見方が為政者やエリートたちの間に生き続けているとの見通し [帯谷 2016; Obiya 2016] のもとに、その展開をより具体的に、そして時系列的に検証していきたいと考えている。

そこで本稿では、帝政ロシア期に焦点を絞り、中央アジア南部が征服された 19 世紀後半以降 1917 年のロシア社会主義革命前までの時期に帝政ロシア領内で書かれたイスラームおよび中央アジア民族誌関連の著作・新聞記事などから、ムスリム女性、特に帝政ロシア領中央アジア（ロシア領トルキスタン¹⁾）の女性とイスラーム・ヴェールをめぐる当時のような情報があり、どのような見方がされていたかを抽出し、若干の分析を加えることを目的としたい。筆者の主たる関心は、ここでは、植民地支配を正当化するための政治的な言説、直接政治的なものではないにしても為政者あるいは植民者の側の言説にあるため、もっぱらロシア語資料を対象とした。

まず、ロシア領トルキスタンにおいて、当時ロシアがサルト²⁾と呼び、この地域の主要住

1) 1865 年ロシア帝国はタシュケントを征服し、1867 年ここにトルキスタン総督府を設置した。その後の征服地域も含め、カザフ草原よりも南部の中央アジア地域（ほぼ現在のウズベキスタン、クルグズスタン、トルクメニスタンの領域に相当）はロシア領トルキスタン Russkii Turkestan、トルキスタン地方 Turkestanskii krai と呼ばれた。ただし、ブハラ・アミール国領およびヒヴァ・ハン国領はこれに含まれない。

2) ロシア語では単数形 sart, 複数形 sarty, サルト人女性は単数形 sartianka, 複数形 sartiianki。広く南部中央アジアの定住民のことで、特にテュルク語を話す人々を指すタームとして、つまりトルキスタン総督府の主たる住民を指すタームとして帝政ロシアが用いた。本稿の文脈では、ほぼ現在のウズベク人に該当すると考えてよいが、さまざまな慣習や生活様式の点ではペルシア語を話す定住民（ほぼ現在のタジク人に相当）と多くの共通点を持つ。サルトとはいかなる人々かについて、ホロシュヒン、ナリフキンにも言及があるが、その歴史的起源や語源、多義性などについては、さらに Ostroumov 1908 を参照のこと。

民とみなすことになったテュルク系定住民の女性に関する東洋学者・民族学者らの記述から女性の服装、とりわけイスラーム・ヴェールに関するものを取り上げる。それは、ひとつには、後のソ連時代のヴェールをめぐる固定的な言説に左右されずに、当時のヴェール着用の基本的な実態を一部なりとも確認するためであり、またひとつにはヴェールの着用を含むムスリム女性の生活やそれを取り巻く状況を植民者ロシア人がどのように語っていたかを検討するためである。

さらに、20世紀初頭、とりわけ1905年にロシア第一次革命が起こり、国内外に変革や革命の気運、ヨーロッパの近代への渴望があふれる時代背景のもとで、ロシアにおけるムスリム女性をめぐる一連の議論においてイスラーム・ヴェール問題がどのように位置づけられ、語られていたか、さらにその中でロシア領トルキスタンのサルト人女性の問題はどのように位置づけられていたのか、その一端を探ってみたい。

なお、本文中のロシア語資料から引用した原綴はローマ字転写し立体で示し、現代ウズベク語原綴は現行の1995年制定のウズベク語改訂ラテン文字（ローマ字）アルファベットによりイタリックで示した。

I ロシア領トルキスタンのサルト人女性のヴェール着用

まず、ロシア人の残した民族誌的記述から、サルト人女性の服装とヴェール着用について情報を整理するにあたって、本稿の文脈から重要なのは、後のソ連時代に社会主義的近代化プロセスの一環として展開された中央アジア南部定住民地域（主としてウズベク社会主義ソヴィエト共和国）における共産党主導の女性解放運動³⁾において、イスラームと家長長制によって女性を抑圧する「悪しき伝統」の象徴として根絶の対象となったのがパランジ *parandzhi*⁴⁾/*paranji* であり、それこそが伝統的イスラーム・ヴェールと見なされたことである。すべての女性がパランジを放棄した社会を築くことが、男性も含めたウズベク人全体の社会主義的民族としての近代化の道だと想定されたのだった。しかし、20世紀半ば以降パランジがほぼ日常生活から姿を消しても、女性たちが頭部を何かで覆う慣習自体がまったくなくなったわけではなく、パランジに代わるものとして女性が着用したと理解され、またソヴィエト政権も黙認あるいは是認したものにルモル *ro'mol* と呼ばれる大判のヘッドスカーフがあった。このスカーフはウズベキスタンで今日にいたるまで、主に年配女性あるいは農村部の女性たちの間で用いられ続けている⁵⁾。こうした点を踏まえて、以下を見ていくこと

3) この女性解放運動については、Azimova 1991; Kamp 2006; 2007; Massel 1974; Northlop 2004 に詳しい。また、帯谷 2011 にその概要をまとめている。

4) 現代ロシア語では *parandzha* と綴る。

5) 本稿の内容には直接関係しないが、筆者の関心のありようという観点から付言しておく、ソ連解体後のウズベキスタンにおいて、中央アジアに歴史的に見られたものとは異なる新しいスタイルのイスラーム・ヴェール着用が観察されるようになり、近年ではそれはヒジヨブ *hijob* と呼ぶ

にしよう。

1 A. ホロシュヒン「サルト人、その生活、女性など」

帝政ロシアの中央アジア征服に従軍した軍人で、民族学者・文筆家としても活動したアレクサンドル・ホロシュヒン Aleksandr P. Khoroshkhin⁶⁾ (1841-1875) は、『トルキスタン地方に関する論文集』中の「サルト人、その生活、女性など」において、タシュケントのサルト人女性の服装について、次のように書いている。

サルト人女性は、多くの場合、白いモスリン製のスカーフ（ウラムル uramal）で頭をおおっている。裕福な者は金糸や絹糸の刺繍のある本物のインド製のものをまとう。おしゃれ好きや名の知れた女性は、ウラムルの上から、私たちのもと [ロシア：帯谷注] で頭痛に苦しむ人の頭に包帯を巻くのと同じようなやり方で、額を横切るようにねじったスカーフを頭に巻く。この頭被いはデュツリャ diurria と呼ばれる。女性の丈の長いブラウス（クイネク kuinek）は胸の上またはのどの下で、留められているか、または紐で結ばれている。…（中略）…女性のズボンに形は男性用と似ているが、唯一の違いは、脛部分がとても細いことで、そのため着る時には足先がやっと通るのである。…（中略）…女性の上着は、たいていは紺色の、ほとんど地面に届くほど長い長衣（ハラート）パランジ parandzhi であり、頭からかぶる。パランジ＝ハラートは絹製、半絹製、木綿製があるが、袖を通すことはなく、そもそもそれは不可能である。袖は元部分では幅広く、先端が細くなっており、背中側へ垂らしてかかとまで達する。両方の袖先は交差させて縫い留められ、絹糸の刺繍が施されている。パランジなしで女性が通りへ出ることはない。その際には女性たちは、黒く分厚いネット、チムメト chimmet で顔をおおうが、これは馬の毛でできていて、ハラートの襟に縫い留められている。この

6) ばれている。イスラーム過激主義への懸念からヒジヨブの着用や販売は厳しい取り締まりの対象となっている。独立後のウズベキスタンでは、国家とイスラームの関係において、国内のイスラームを管理しようとする国家の側が「よいイスラーム/悪いイスラーム」という二分法的な見方をする傾向が顕著で、伝統的なヴェールであるところのルモルは「よいヴェール」、外来のヒジヨブは「悪いヴェール」であるというロジックが使われる。例えば 2013 年にムスリム宗務局のイマームが出したファトワーでは、イスラーム・ヴェールの着用をしないことが奨励され、着用するとしても敬虔なウズベク人女性にとってはルモルこそふさわしく、それで十分であるとされた [帯谷 2016; Obiya 2016]。

6) ホロシュヒンはオレンブルグ県に生まれオレンブルグ陸軍幼年学校に学んで東洋諸語を習得、ウラル・コサック軍陸軍中佐となった。志願してトルキスタンへ赴き、ブハラ遠征などに参加。ロシアの保護国となったヒヴァ・ハン国顧問を務め、トルキスタン地方全般について多くの学術的情報を収集した。ロシア帝国のさらなる中央アジア征服のプロセスにおいて現在のタジキスタン領内で戦死、ブハラのロシア正教徒墓地に葬られた [Polovtsov 1901: 414]。いわゆる軍人文筆家 voennyi pisatel' で、当該著書はその死後に刊行された。従って、ホロシュヒンの観察は 1960 年代半ばから 1970 年年代前半にかけてのものである。なお、引用した論文の中でホロシュヒンがサルト人女性について言及したのは、サルト人の概要、サルト人（男性）の衣服、身じまい、子供、性格、生業、農具と農法、作物、家畜など生活全般についての記述の後である。

ネットはまったく透けては見えないので、わずかに横の部分から、時にとても整った横顔の線を捉えることができるのみだが、あるいは色あせたり、古くなったりしたネットが目や黒い眉を垣間見せてくれることもある。黒いネットを所有できない場合には、白のモスリンを着ける。老女と少女の衣服が成人女性の衣服と異なる点は、老女は、男性と同じように、頭にさほど大きくないターバン、チャルマ *chalma* を巻き、少女は一定の年齢まではパランジとチムメトを着けないということである。さらに、女性の衣服の相違点は、老女は、私たちのもと [ロシア：帯谷注] でもそうであるように、地味な暗色を好むが、若い娘とはいえば、他のおしゃれ好きを見るや目が痛くなるほど鮮やかなその色合いに夢中になってしまうということにもある。サルト人女性はパランジの下に厚手薄手のチョッキ、またムルセク *mursek* と呼ばれる幅広の袖の付いた薄いハラートを着る。サルト人女性はベルトは着用しない。[Khoroshkhin 1876: 113-114]

2 ナリフキン夫妻『フェルガナの現地定住民女性の日常生活概説』

トルキスタン総督府の首都タシュケントからは遠く離れたフェルガナ州ナマンガン郡の村で現地の住民たちの間に暮らし、彼らの生活をつぶさに観察し記述したナリフキン夫妻 Vladimir P. Nalivkin (1852-1918), Mariia V. Nalivkina (生没年不明)⁷⁾ の記述はより詳細である。1886年の著書『フェルガナの現地定住民女性の日常生活概説』では、この地方の女性たちの服装を記述した章で次のように書かれている。

朝、目覚めて床から起きると、サルト人女性は手のひらで髪を撫で付けるだけで、頭にスカーフを着けるが、それなしでいることは礼節を欠くだけでなく、罪であるとさえみなされている。女性にとって特に大きな罪とみなされるのは、クルアーンのある部屋でスカーフをつけずにいることであり、またクルアーンの朗読の時には多くの者はスカーフをしっかりと頭に巻きつけて、スカーフの中で顔を輝かせるのである。… (中略) …

現地女性の衣服の特質と外見に最も大きな影響を与えたのは、気候、慣習の特徴、そして宗教である。平均して約半年間の長く暑い夏、そして足を折って床に座る習慣と頻繁に馬に乗る習慣は、女性に対してその衣服のほとんどすべての部分に動作の際にあまり慎み深くしなくてよいような形を与えることを余儀なくさせ、また宗教は、通りを歩く時に他人の目には一番上に着用しているもの—それは、男性の目を引かないように鮮やかなものであってはならないのだが—しか見えないように衣服を規定している。

7) 夫ヴラジミール・ナリフキンはロシアのカルーガ出身の貴族で、ヒヴァ遠征、コーカンド遠征など中央アジア征服に従軍した軍人であったが、やがて軍を辞してトルキスタン地方に暮らし、現地語(サルト語、タジク語)の研究と教授、民族学・歴史学的研究などに従事した。タシュケントのロシア語・現地語学校やタシュケント教員セミナーの教師なども務めた。ロシア人の中で最もサルト人の言語と慣習に通じた人物と評された。妻マリヤ・ナリフキナは夫とともに研究に携わり、中央アジアで最初のロシア人女性東洋学者とも評される [Kononov red. 1989: 170-172]。

ズボン（イシュタン ishtan）は上部から膝まではとても幅広く、下に向かってかなり細くなっていくので、足先またはくるぶしまで届く裾口を特に苦もなく通るのは足先だけである。裾には多色使いの組紐ジヤク dzhiiak が縫い付けられ、ズボン本体はウエスト部分をイシュタン・バグ ishtan-bag という紐で締める。少女たちは2-3歳からズボンをはき始める。大人にとってはズボンをはかないのは罪であり、礼儀を欠くとみなされ、それゆえ時に衣服のこの部分は、アラビア語で「必要不可欠なもの」を意味するリヤズィム riiazim と呼ばれる。…（中略）…

コイナク koinak というブラウスは常にとても身幅が広く、また床につくほど長く作られ、これまた幅広く長い袖が付いていて、袖先は膝よりもかなり下に届く。…（中略）…

上記において、私たちは頭に何もつけずにいることは罪だとみなされるとすでに述べた。守護天使は、もし女性が頭にスカーフをつけずに、食べ物を食べるなら、彼女のもとから飛び去ってしまう。白または赤のモスリン製、または稀に綿布製で、ふつう1.5アルシン⁸⁾四方以上の正方形のスカーフは、対角線で二つに折ると、三角形になり、それを頭の上ののせるか、あるいは結ぶ。頭にのせる場合には、三角形の辺は耳の後ろへはさみ、端は胸の上に垂らす。結ぶ場合には、スカーフは額の上部を隠すようにして頭を包み、端は後ろに垂らす。

お客に行くのに家から出る際には、大きなスカーフ、ルマル rumal の上からドゥラチャ duracha というスカーフを額に巻く、それはあまり大きくない、必ず模様のある鮮やかな色のスカーフで、帯状に何回か、ココージュニク⁹⁾のような形に頭に巻かれる。

夏の女性の家庭着は、ズボン、ブラウス、スカーフである。…（中略）…

家から出る時には、まだ敷地内の中庭にいるうちに、女性は馬の黒毛でできた、顔と胸をおおう分厚いネット、チムベト chimbet (chashm-band の省略形：原注) を頭につけ、そして灰色、または濃紺色の木綿、時に半絹の布地でできた長いハラート、パランジ parandzhi をチムベトの上から頭にかぶる。パランジの裾はかかと、または地面まで届く。長い袖の先は背中側に垂れ、下向きに糸で留められ、地面に引きずることも稀ではない。礼儀作法上は、通りを歩く時には、可能な限りパランジの下から女性のカラフルな衣装が見えてはならないが（「彼女らは、その閉ざされた衣装が露わにされるように足を運んではならない」クルアーン第24章第31節¹⁰⁾：原注）、この決まりは、特に現在では、ほとんどまったく守られていない。パランジの着用のしかたによって、今

8) 1アルシンは71.12センチメートル。

9) ロシア人女性の着用する頭飾り。

10) 井筒俊彦訳ではこの箇所は「うっかり地団太ふんだりして、隠していた飾りを気づかれたりしないよう」という訳になっている[コーラン1986:195]。ナリフキン夫妻は、この著作の中でクルアーンから多くの引用をしているが、ロシアでアラビア語原典から初めて露訳(1877年刊行)・注釈(1878年刊行)を行ったサブルコフ Gordii S. Sablukov (1804-1880) に依拠している。

では現地住民は女性がどこの町の出身かを知ることができる。例えば、ナマンガンではパランジの上端は常に額まで下ろされ、チムベトの下部先端はパランジの下から出ている。コーカンドでは逆に、パランジの上端は頭頂部中ほどにあり、手で押さえられる裾はチムベトの端と下部をおおう。

町から離れた村落部ではパランジを目にするのは稀で、最も裕福な女性たちはそこでは、普通のハラートを代替としており、パランジと同じように頭からかぶる。

[Nalivkin & Nalivkina 1886: 92-97]

さらに、ナリフキン夫妻は、著書の最後の章を「売春婦」と題し、夫妻が暮らしたフェルガナ州におけるいわゆる売春宿 *publichnyi dom / dom terpimosti* の存在にかなり詳しく言及している。それらの施設が出現した直後からその女性たちはパランジをつけずに顔を露わにして外へ出るようになり¹¹⁾、そのことに地元住民のみならず、パランジをつけたサルト人女性を見慣れていたロシア人も当初驚愕したと記している [Nalivkin & Nalivkina 1886: 235-241]。

3 小 括

以上、おおむね今日のウズベキスタンにおける主要地域のうちの2つ、すなわち首都タシュケントおよびフェルガナ盆地における女性の服装とヴェールについて、ホロシュヒンとナリフキン夫妻の記述は大筋において一致しているといえる。まとめてみると次のようになる。

サルト人女性はクイネク *kuinek* またはコイナク *koinak* と呼ばれた、非常にゆったりとした長いブラウス（私たちの感覚からすれば、ワンピースと言ってよい）にズボンを着用するのを基本的な服装とした。このブラウスは現代の標準ウズベク語では *ko'ynak* または *ko'ylak* と呼ばれる。ナリフキン夫妻によれば、ズボンの着用は不可欠とみなされていた。さらに、このブラウスの上にチョッキやハラートを着ることもあった。ブラウスやハラートの上からウエストを帯、紐、ベルトなどで締めることは通常はしなかった。

頭部はおおわねばならず（おおわなければ信仰上の罪になる）、室内においても常に、ウラマル *uramal* またはルマル *rumal* と呼ばれる大判のスカーフを着けた。これは、Iで言及した現代ウズベク語のルモルに当たると考えて間違いない（以下、ルモルと呼ぶ）。着用法はスカーフを三角に折って長辺の中央が額の上にくるように頭にのせ、両端を結ばずに胸側

11) この理由については、ナリフキン夫妻は、売春を生業とするようになったサルト人女性たちの多くは夫や両親のもとから逃げ出した女性であり、パランジを着けずに出歩くことは、「昨日まで彼女を抑圧していた過去の社会に唾すること、つい最近まで彼女を石打ちにするぞと脅かしていた体制の廃墟の中で彼女の歌う独自のラ・マルセイエーズ[フランスの革命歌、後に国歌：帯谷注]の中間にあたるようなこと」であり、「独自の自由の謳歌であり、彼女を前もって救し、彼女に民としての自覚 *grazhdanstvennost'* を与え、自分の人生に対する永久の恐怖から救い出してくれたものたちへの独自の挨拶」だったと述べている [Nalivkin & Nalivkina 1886: 238]。

に垂らすか、あるいは両端を後ろにまわしてうなじのあたりで結ぶというものである。

ルモルの上からさらに、デュリリヤ *diurria* またはドゥラチャ *duracha* と呼ばれる色柄ものスカーフを帯状にして頭に巻くこともあり、これはある種のおしゃれ、おめかしと見なされていたようだ。この二つも若干の音の転写の違いを反映したと思われる綴りの違いと、後者には指小形語尾 *-cha* が付く違いがあるものの、同一のものだと見て差し支えなく、現代ウズベク語では *durra* および *durracha* という語彙が確認できる（以下、ドゥウラと呼ぶ）。

そして、女性の外出時の上着として必ず着用されるのが分厚い長衣 *parandzhi/paranji* であり、袖を通さずに頭からすっぽりとこれをかぶった。これとセットで用いられたのが、顔をおおう黒い馬毛のネット、チムメト *chimmat* またはチムベト *chimbet*¹²⁾ である。現代ウズベク語では *chimmat* という（以下、チムマトと呼ぶ）。ホロシユヒンによれば、黒いネットを所有できない女性はこれを白いモスリンの布で代用した¹³⁾。女兒は一定の年齢まで¹⁴⁾ は *parandzhi* や *chimmat* を着けなかった。また、ナリフキン夫妻は、*parandzhi* の着用の仕方に地域差があること、町から離れた村落部では *parandzhi* ではなく普通のハラート¹⁵⁾ を頭からかぶることも言及していた。

ヴェールという意味合いでは、第一に室内でも常に着用するシンプルなスカーフとしてルモル、第二にさらに外出時にその上に着ける、おしゃれ用と思われるスカーフとしてドゥウラ、第三に外出時に全身をおおい、女性の顔や髪、身体、および内側に着ている色鮮やかな衣装を見せないための *parandzhi* と *chimmat* のセットという三重構造があったことになる。

II ロシアのサルト人女性への眼差し

それでは、植民者としてのロシア人は、サルト人女性にどのような視線を向けていたのだろうか。参照できた資料は必ずしも多くはないが¹⁶⁾、すでに触れたホロシユヒンの記述なら

12) このネットはチャチヴァン *chachvan/chachvon* とも呼ばれるが、ホロシユヒン、ナリフキン夫妻ともにこの呼び方には言及していない。

13) V. 1907 は、ヴェールを着用する年齢になると、まず白いものを着け、やがて花嫁になる準備ができると黒いものに代えるとしている。

14) 一般的には初潮があるまでと考えられている。V. 1907 は 12 歳としている。

15) 普通のハラートとは、*parandzhi* のように飾り袖が背中に縫い留められているのではなく、腕を袖に通して実際に着用することができるものという意味であると思われる。

16) 新聞・雑誌記事調査の第一段階として、京都大学地域研究統合情報センターの「トルキスタン集成」*Turkestanskii sbornik* データベースにおいて「女性(の)」「ムスリム女性(の)」「サルト人女性(の)」という言葉タイトルを含むものを検索し、Andreev 1910; Privet... 1908; Simonova 1894; V. 1907; Zhenshchina... 1910 などを得た。また、ナリフキン夫妻については、現地語に精通し、長期間村落部に暮らして他の追隨を許さない詳細な観察と記述を行ったこと、また妻マリヤの女性としての視点が大きく反映されていることから、別途検討する必要があると思われるため、II における考察には含めていない。

びに当時のロシアの新聞記事から、さしあたりここでは複数の資料において言及が認められ、植民者ロシア人のサルト人女性に対する見方を反映したものと考えられる以下の3点を指摘しておきたい。

1 サルト人女性の美しさと媚、早老とサルト人男性への従属

サルト人女性の特に若い頃の美しさについてはしばしば言及されている。サルト人女性は外出時にはパラソルとチンマトを着用しているのが容易にはその顔を見ることはできないが、それだけにその顔を見ることへの期待や、偶然目にした時の驚き、褐色もしくは黒い眼、植物の汁を眉墨にして描かれる黒い眉、浅黒い肌への賛美など、オリエンタリズム的なエキゾチックな美への関心を見ることができる。概して、若いサルト人女性はたいへん美しいと見なされており、大きな黒い瞳、褐色の髪、小柄な均整のとれた体格などへの言及が見られる [Khoroshkhin 1876: 115; Nalivkin & Nalivkina 1886: 91]。

それと同時にしばしば指摘されるのは、サルト人女性の媚あるいはコケティッシュさ *koketstvo* である。例えば、ホロシユヒンは次のように述べている。

すべての民族の女性に共通する性格の特徴は、サルト人女性にも縁のないものではない。彼女らはコケティッシュで、些細なことでけんかや、つかみ合いさえするし、お互いに対して根も葉もない噂を振りまく。ある者は夫を手中に握り、またある者はその束縛に苦しみ、ついには愛人のもとへ走る。つまり、サルト人女性には大小の情熱が備わっている。彼女らは復讐心が強く、嫉妬深く、そして他の女性たちよりもその嫉妬心において危険である。 [Khoroshkhin 1876: 116]。

また、『ノーヴォエ・ヴレーミャ (新時代)』のタシュケント通信員は「サルト人女性について」という記事において、1907年頃にはタシュケント新市街¹⁷⁾をパラソルは着けているものの男性による同伴なしで散策したり辻馬車で訪れたりするサルト人女性が現れ、そうした女性たちは「可愛らしいおばかさんたちのあまりに無邪気な媚を高く評価するヨーロッパ人男性と会えば、自分の顔から忌まわしいものを進んで取り除くことを好む」と述べ、実際に「驚くほどの美貌をもった黒い眼に浅黒い肌の娘たち」と身振り手振りです話してみたところ、「驚くほど優雅で、自然で素朴な媚」が返ってきたと書いている [V. 1907]。

一方で、ヨーロッパ的な美の観点からも女性としての魅力を備えていると映るサルト人女性は、老け込むのがとても早く、30歳を過ぎた頃にはすでに老女ようになってしまってもしばしば語られる。V. 1907は、上記記事冒頭においてサルト人女性を「青年早期には大部分が類稀な美人、中年になるともう老女」と簡潔に表現している。ホロシユヒンは、「少女たちは13歳、14歳、15歳で嫁に出されるが、それゆえに30歳にもなれば、とりわけ孤

17) 帝政ロシアによる征服の後、元々ムスリム住民が住んでいた地区に隣接して建設されたヨーロッパ的な市街。トルキスタン総督府の行政機関等が集中し、ロシア人らが居住した。

独な、労働ばかりの生活の中では、ほとんど老女になってしまう」[Khoroshkhin 1875: 115]と述べ、そうした状況の元凶は、夫が後からより若い妻を娶れば年配の妻は顧みられなくなり、家の中で家事労働などに明け暮れることのみを強要されることから、一夫多妻制と家父長制にあることをほのめかしている。さらに、こうした孤独で単調な生活が、飲酒や麻薬使用も含む「たくさんの醜悪で不自然な慣習と嗜好を生みだす」とも述べている [Khoroshkhin 1875: 116-117]。

2 ロシアの到来によるサルト人女性の変化

サルト人女性は概して自由に家の外へ出られないというようなイメージの一方で、ロシアの中央アジア征服以降、その影響のもとでサルト人女性にも変化が生じたことも指摘されている。その変化に関する記述にはおおむね2つの方向性があるようである。

ひとつは、上述の媚とも関係するが、いったん外へ出たサルト人女性たちは時に積極的にロシア人男性との接触を持つことを志向するというものである。ホロシユヒンは、上記引用中のサルト人女性は「他の女性たちよりもその嫉妬心において危険である」という言葉に続けて、「彼女らは『信仰篤い』人々が彼女らに対する敬意を断固として拒絶するとよくわかっており、それゆえに今、憎悪、欠乏、抑圧、人生への渴望というものが、そしてまた特にロシア軍が存在する状況のもとでは、利益というものが、あらゆるサルト人の町々で、それ以前にはなかった特別な女性の階級を生み出した」と述べている [Khoroshkhin 1876: 116]。記述はあまり具体的ではないが、金銭目的でのロシア人男性への接触を含意しているのではないと思われる。また、それから約30年を経た観察として、タシュケント新市街に姿を現すようになったサルト人女性についての語りはすでに上記に引用した通りである。

もう一つは、19世紀後半のヨーロッパそして中東におけるフェミニズムや女性解放の議論がロシア帝国内にも反映され、男女平等や女性の解放を求める人々の影響がサルト人女性にも及ぶのではないかという文脈のものである。上記 V.1907 は、サルト人女性がタシュケント新市街に現れるようになったことをサルト人女性の間で「自由への志向が年々ますます大きくなっている」という文脈で紹介しており、この「自由」とは、女性の行動の奔放さや軽率さに結びつけられる一方で、その背景としてももちろんヨーロッパ的なフェミニズムの見地から見た男女平等と女性の解放の進歩性を含意している。記事の著者は、「顔を露わにするだけでなく、夏の暑さのもとでは広くデコルテを開けた服を着て、この上なく解放された女性たちが通りを闊歩するヨーロッパ・タシュケント」において、「わがヨーロッパ婦人たちは、その開放的な衣装や、男性との自由な交流や、その他の平等の諸現象によって、気の毒なサルト人女性たちの中にどんな思想や感情を呼び起こすだろうか」と書き、「サルト人女性が公然と自ら野蛮な道徳に基づくおおいを捨てる決意をする時が来るのはまだ先のことだろう」と結んでいる。ここでは、顔を出していること（すなわちヴェールを着用しないこと）と露出の多い衣服を着用することが「この上なく解放された女性」を象徴していること、

加えて若干蛇足ながら、タシュケントという都市空間そのものが新市街＝ヨーロッパ＝進歩的、旧市街＝地元文化・サルト・イスラーム＝伝統的・後進的というように植地的な二分法を非常にわかりやすい形で内包していたことにも着目しておきたい。

3 ロシア・ムスリムの中のサルト人女性、イスラーム世界の中のサルト人女性

同じく V.1907 は、サルト人女性を他のタタール人をはじめとするロシア・ムスリム女性あるいはより広く中東ムスリム女性と対比させ、短いながらも興味深い記述をしている。いわく、サルト人女性は「マホメット教世界において最も不幸な存在」であり、「トルコ人女性の運命はみすばらしく、タタール人女性、そしてマホメット教徒女性全般の生活はすばらしいものではないが、サルト人女性の存在以上に悲惨で奴隷的なものを何か想像するのは難しい」。さらに、同じトルキスタン地方の遊牧民キルギズ人（おそらくこの文脈ではカザフ人を指す）の女性との対比においても、「キルギズ人女性よりも教養があるサルト人女性の奴隷のような恭順さは理解できない」と述べている。サルト人女性は12歳から一生涯分厚いネットをかぶるのに対し、キルギズ人女性は完全に顔を露わにしたまま日々暮らしていると、ここでも、両者の「不幸」の程度を示すのに、顔を露わにしているか否か、すなわちヴェールの有無が持ち出されている。

Zhenshchina... 1910によれば、この当時、イスラーム・ヴェール問題は、思考力のあるムスリム社会の様々なグループにとって、最も重要な時事問題だと見なされていた。

このような一般的な新聞記事に加えて、より専門的な知識を背景とした見解として、東洋学者にして異族人教育の専門家でもあったオストロウモフ Nikolai P. Ostroumov (1844/46/48-1930) のものを挙げよう。20世紀初頭の著作『ムスリム女性の権利の状況』においてオストロウモフは同時代の中東（具体的にはトルコ、エジプト、ペルシア、チュニジア、モロッコが挙げられている）で唱えられ始めた女性解放運動の影響がロシア帝国内のムスリム女性にも及んでいることに言及しつつ、当時ロシアでイスラームにおける男女平等を主張し、ムスリム女性の解放を訴える最先鋒の論客のひとりで見なされていた女性東洋学者レベジェヴァ Ol'ga S. Lebedeva (1854-?)¹⁸⁾ をクルアーン解釈の観点などから手厳しく批判している [Ostroumov 1911]。同時に、彼女のイスラームにおける本源的な男女平等という主張をトルキスタン地方のムスリムは断固拒絶しており [Ostroumov 1911: 6]、彼女が執筆した『ムスリム女性の解放について』（サンクトペテルブルグ、1900年）の第1章をオストロ

18) カザン市長の妻で、タタール語その他のテュルク語に精通し、翻訳家・東洋学者として活躍したロシア人女性。タタール人東洋学者カユム・ナースィリー (1825-1902) らの薫陶を受けた。オスマン朝下のトルコに滞在し、ギュルナル・ハヌム Gülnar hanım の筆名でロシア文学作品をトルコ語に翻訳した。1895年にはサンクトペテルブルグに移り、東洋学協会の設立に尽力、初代会長となった [Kononov red. 1989: 143-144]。レベジェヴァのムスリム女性解放に関する詳細な見解とそれを取り巻く当時の状況を検討することは本稿の趣旨からも重要であるが、別稿に譲ることとする。

ウーモフが編集長を務めていた『トルキスタン地方新聞』Turkestanskaia tuzemnaia gazetaに転載するや、現地ムスリム（男性）のあらゆる層から「恐ろしい抗議」の声があがり、以降の掲載を中止せざるを得なかったと述べている [Ostroumov 1911: 45]。オストロウモフはイスラームを研究し、またトルキスタン地方の事情に精通した立場から、イスラームにおいては本質的に男女平等や女性解放は受け入れられない、従って、とりわけイスラームの伝統が根強いトルキスタンにおいては、ムスリム女性の解放はヨーロッパ的な教育と知識なくしてはありえないとの結論に達したのだった。

4 小 括

以上により、植民者としてのロシア人は概して、パランジに閉ざされたサルト人女性の美しさや彼女らとのたまさかの交流にいわば男性としての視線から関心をもっていたことがうかがえる一方で、サルト人女性について、社会との接点を持たず、家庭においてサルト人男性の抑圧のもとに置かれた気の毒な、不幸な犠牲者にとらえていたことが確認できた。また、サルト人女性たちの「自由」が語られる時には、現地の規範からの逸脱という文脈で取り上げられることが多く、いったんその規範の外へ出た女性については、媚を伴うような男性への接し方や行動の奔放さに結びつけてその自由を理解しがちであったことも読み取れた。サルト人社会の内部にあって人々の尊敬を集めるような女性、例えばいわゆる良妻賢母的なサルト人女性のイメージや女性知識人の存在などについては管見の限りではあまり伝えられた形跡がなく、サルト人女性はもっぱら、女性解放運動の兆しが現れたエジプトやトルコなど中東の女性と比しても、さらにはロシア・ムスリムであるタタール人やキルギズ人などの女性と比しても、最も抑圧された、従属的で不幸な女性と語られる傾向があったのである。

お わ り に

本稿では、19世紀後半から20世紀の中央アジア南部定住民であるサルト人女性を観察したロシア人の記述から、第一に、ヴェール着用の実態について、ルモル、ドゥツラ、パランジとチンマトという三重構造があったこと、頭部をおおうことのほかに、ゆったりとしたブラウスにズボンを着用し、ブラウスの上からベルトは締めないというように、体の線を見せない服装コードがあったことを確認した。とりわけ、女性が室内においてもルモルを常用しており、そこにイスラーム的な意味があると理解されていたとの記述には注目すべきである。その点からすると、後のソ連時代のパランジ根絶キャンペーンによって、ルモルは、正確には、パランジの代わりに外出時に着用されるようになったのではなく、従来最も内側に着用されていたヴェールが外側のものになったということになる。ムスリムの側からすれば女性が頭部をおおうという慣習は維持することができ、ソヴィエト側からすれば外出時のヴェール着用の放棄をパランジとチンマトの放棄をもって代表させることで目標を達成したと主張

することができるのであるから、ルモルは、ある意味で緩衝であり、妥協点であったといえるだろう。一方、二番目のヴェールであるドゥツラについては、本稿では仮におしゃれ用としたがその意味や位置づけはまだ必ずしも明確にできておらず、ソ連時代にそれがどのような扱いをされたのかについても今後の更なる検討に委ねたい。

第二に、植民者としてのロシア人がサルト人女性に向けた眼差しを検討し、ロシア・ムスリム女性の中でも、さらには中東を含むムスリム女性全般においても、最も悲惨で不幸な状況に置かれた女性とみなす言説が存在していたことがわかった。そうした言説は、裏を返せば、そのような犠牲を強いているサルト人男性と、サルト人男性の文化であるところのイスラームと家父長制の伝統をその抑圧性や後進性において批判しているという点で、本稿冒頭に述べた、本質的に女性を抑圧する、劣等なあるいは後進的な文化としてのイスラームという言説と同様のものである。そして、このような言説において、ヴェール、とりわけ分厚い長衣パランジと黒いチンマトは、同じ中央アジアのムスリム女性であるキルギズ人とサルト人女性の「不幸」の度合いが顔をおおっているかどうかによって表現されていたことに顕著なように、明らかに抑圧性や後進性を示すマーカーとなっていたと言えるだろう。

ロシアにおけるこうした言説の形成は、植民者としてのロシア人と帝国内のムスリムとの独自の相互交渉や帝国内におけるイスラーム研究の発展のプロセスなども視野に入れながら、さらに詳細に検討されるべきであろう。その意味では、本稿では十分に言及できなかったが、オストロウモフの『ムスリム女性の権利の状況』は当時のロシア帝国におけるムスリム女性の解放をめぐる議論や学問としてのイスラーム研究の進展に関連する興味深い状況を伝えている。これについては、稿をあらためて検討したい。

[補記] 本稿は、科研費・基盤 (B) 「中央アジアのイスラーム・ジェンダー・家族——『近代』再考のための視座の構築——」(課題番号, 2012~2015 年度, 研究代表者帯谷知可) および京都大学地域研究統合情報センター共同利用・共同研究個別ユニット「中央アジアの社会主義的近代化と現代社会——イスラームとジェンダーの視点から——」(2015 年度, 研究代表者帯谷知可) の研究成果の一部である。

参考文献

TS: Turkestanskii sbornik

(京都大学地域研究統合情報センターの「トルキスタン集成」データベースを利用 <http://app.cias.kyoto-u.ac.jp/turkestan/>)

Ahmed, L. (1992) *Women and Gender in Islam: Historical Roots of a Modern Debate*, New Haven and London: Yale Univ. Press. [邦訳: ライラ・アハメド (2000) 『イスラームにおける女性とジェンダー——近代論争の歴史的根源——』林正雄・岡真理・本合陽・熊谷滋子, 森野和弥訳, 法政大学出版局]

- Andreev, G. (1910) Kartinki Turkestana. Vesel'e sartiyanok I. *Sredniaia Aziia*. Kn. 1, 18-21. (TS 534, 15-18.)
- Azimova, D. A. (1991) *Zhenskii vopros v Srednei Azii. Istoriia i sovremennye problemy*. Tashkent: Fan.
- 井筒俊彦訳 (1986) 『コーラン (中)』岩波文庫.
- Kononov, A. N. red. (1989) *Biobibliograficheskii slovar' otechestvennykh tiurkologov. Dooktiabr'skii period*. 2-e izdanie, pererabotannoe. Moskva: Glavnaia redaktsiia vostochnoi literatury, "Nauka."
- Kamp, M. (2006) *The New Woman in Uzbekistan: Islam, Modernity, and Unveiling under Communism*. Seattle.
- Kamp, M. (2007) Femicide as Terrorism: the Case of Uzbekistan's Unveiling Murders. In: Wellman, J. (ed.) *Belief and Bloodshed: Religion and Violence across Time and Tradition*. Lanham, 131-144.
- Khoroshkhin, A. P. (1876) Sarty, ikh khoziaistvo, zhenshchiny i proch. *Sbornik statei kasaiushchikhsia do Turkestarskogo Kraia A.P. Khoroshkhina*, Sankt-Peterburg. (TS 116, 97-118.)
- Massel, G. J. (1974) *The Surrogate Proletariat: Moslem Women's Liberation and Islam in Soviet Uzbekistan 1926-1929*. Princeton.
- Nalivkin, V. P. & M. Nalivkina (1886) *Ocherk byta zhenshchiny osedlogo tuzemnogo naseleniia Fergany*. Kazan'. [英訳: Nalivkin, V. and M. Nalivkina. Edited by M. Kamp. Translated by M. Markova and M. Kamp. *Muslim Women of the Fergana Valley. A 19th-Century Ethnography from Central Asia*. Bloomington. Indianapolis, 2016.]
- Northlop, D. (2004) *Veiled Empire: Gender and Power in Stalinist Central Asia*, Ithaca and London.
- 帯谷知可 (2005) オストロウモフの見たトルキスタン 『ロシア史研究』 76, 15-27.
- 帯谷知可 (2011) フジウムへの視線——一九二〇年代ソ連中央アジアにおける女性解放運動と現代—— 小長谷有紀・後藤正憲編『社会主義的近代化の経験——幸せの実現と疎外——』, 明石書店, 98-122.
- 帯谷知可 (2016) 社会主義的近代とイスラームの交わる場所——ウズベキスタンのイスラーム・ヴェール問題からの眺め—— 村上勇介・帯谷知可編『融解と再創造の世界秩序』青弓社, 161-183.
- Obiya, C. (2016) Politics of the Veil in the Context of Uzbekistan. In: Obiya, C. (ed.) *Islam and Gender in Central Asia: Soviet Modernization and Today's Society* (CIAS Discussion Paper No. 63). Kyoto, 7-18.
- Ostroumov, N. P. (1908) *Sarty. Etnograficheskie materialy. (Obshchii ocherk)*. Izdanie tret'e dopolnennoe. Tashkent.
- Ostroumov, N. P. (1911) *Sovremennye pravovoe polozhenie musul'manskoi zhenshchiny*. Kazan'.
- Polovtsov, A. A. (sos.) (1901) *Russkii biograficheskii slovar'*. T. 21. Sanktpeterburg.
- Privet... (1908) Privet musul'mankam. *Russkoe slovo* 114. (TS 470, 86.)
- Simonova (Khokhriakova), L. (1894) Charodeistvo, gadanie i lechenie cartianok v Samarkande.

- Spravochnaia kniga Samarkandskoi oblasti.* Samarkand, 90-122. (TS 526, 40-72.)
- V., L. (1907) O sartiankakh. *Novoe vremia* 11339. (TS 445, 183-184.)
- Zhenshchina... (1910) Zhenshchina po musul'manskomy pravu. *Turkestanskii kur'er.* (TS 542, 161-166.)

(京都大学地域研究統合情報センター)